

でその各所が相互に調和し合っているのであり、世界は、美しく、不可思議に、恐しく、そして崇敬の念に満ちて、動き続けているのだ」と。

ケルト神話、アーサー王の物語には、妃グウィネヴィアに裏切られる王の苦悩が描かれている。三人によって織りなされる自由と哀しみ。三の主題はケルト神話において、他にも三人の妖精女王、その女王も三相一体で、つまりは九つの相をもつなど、マジカル・ナンバーとなっている。一によって全体を支配するのでもない、二によって細部に閉塞するのでもない。(トライアド)の変幻自在さは、古代の海や森の深遠な不可思議さ、豊かな自然の成長を開示するかのような神秘に満ちている。

## 『雪の夜に語りつぐ』——ある語りじさの昔話と人生

笠原政雄 語り・中村とも子 編 (福音館)

「自然は芸術を模倣する」とは、オスカー・ワイルドの言葉だが、モリスの結婚は、まことにケルト的自  
然から生み出された芸術を模倣しているかのようである。しかしモリスは、その模倣によって芸術の秘密を得て、自分の人生という装飾芸術をそこからこそ築きあげていったように思える。それは、どのようにしてかという点、同じ森の生命すべてを存分に引き立て、自らも濃密に輝き、人類の歴史を含んだ自然への崇敬を形にしていくことである。そのような気高い王者の所行こそ、モリスが「建築」と呼び「装飾」と呼び慣らわしていたものだろう。王者の伝記を読み終えた味わいがした。  
(十文字学園女子短期大学)

近藤伊津子

あれからもう五年の歳月が流れたとは思えないことである。笠原のじぎがたくさんのむかしをわが家で語ってくれたことが。

むかしばなしに興味をもった私たち仲間の依頼で、雪のゆるみかけた越後、長岡から、餅を土産に気さくに出かけて来てくれた。少し腰を曲げたまま、細身の体を軽やかに運び、「おれ、無口でね」と、喉のかすれをかばいながら、むかしをきかせてくれた。かたり口は、餅のうまさと同じに、やさしく飾らぬ品のよさで、むかしを引き立たせる。

当時、わが家では、十五歳の息子が父親に抗いあえていた頃であったが、「むかあしね、あったてんだがね」と、食後さりげなくはじめたじぎのむかしは、息子の心を引きつけてしまったようであった。

おれが生まれる前、腹の中にいたとき、母親からきいたはなしをおぼえている。姉さんたちに、毎夜のようにきかしてたんじゃねえろうか、アッハハハ。おれ

がなんでそんなに話が好きになったのかと、自分でもふしぎでときどき考えてみたりするんだ。――

母の胎で丸くなって体中で聞いていたに違いない、そして、母の性質が遺伝したに違いない。

むかしをしるとき、目に浮かぶのは、そのはなしをしてくれた母親の、ちょっとした仕種、声の調子とか、又、おせんべいの中に、豆の炒ったのが入っているのを見ても、『へびもこと豆炒り』の話を思い出したりすんだ。母親は豆を炒りながら、「帯とけ、帯とけ」とかいうてるの。うん、きつと、ふが割れて豆に筋が入る。あれが「帯といた」とかいうんだね。母親は、いとこ煮するために「里芋てやな、これは百姓とおんなじみの、着てるんだで」「栗は大尽だよ、イガ着て皮着て、シブまで着て、重ね着してるんだ、お金持ちだよ。生姜てやな、礼儀正しいて袴はいてるんだ」

むかしをしてくれた母の姿、声が、そのまま、じさにむかしをさせる。

おれは『ブツ』だとか『海行ごう、川行ごう』『さば売りどん』『うそつきサン』『鳥のみじさ』なんかが好きで、母親にせがんで何回も聞かしてもろうたけどさ、そういう話以外は、たいてい一回きりしか聞いてないんだよね。きょうだいみんな語れないんです。おれだけに母親の話が『遺伝』したみたいなものだね。

——そこで『鳥のみじさ』がはじまった。

むかあしね、じさが山しごとに行つた。

……見たこともねえきれいな鳥が、ぶあぶあてとんできてとまった。

「じじい、じじい。だんごくれ、だんごくれ」て、その鳥がいうたと。

……

あやちゆうちゆう こゆちゆうちゆう

錦さばさば ごよの盃もってまいらましよう

ピピラピー  
て鳴くがんだと。——

細く透明な声で、こどりが腹のなかにとびこんで鳴くのを、いとしげにくり返し歌ってくれた。

おれ、これは恋愛のはなしでねえかと思っているよ。——

寢床のソファベッドに腰かけて、息子はテーブルコーダーを抱え込み、じさの横で、はなしに身を委ねていた。

じさのはなしは、ゆるりと間をおいては、途切れることなく果てなく続いた。

十八の頃、食品問屋に奉公していたの。二・二六事件の大雪の翌々日、荷をリヤカーにのせ、自転車で引っぱったんだが、あれがいまでも忘れられない

だ。雪がいったばいで、もう動かんないのよ。それでも、どうでも武蔵境むさしかきの駅前駅前の店へ行けてね。片道七里もあるんだよね。築地を出て、日比谷公園を抜け外務省、国会議事堂、四谷見附、新宿、そして、武蔵境まで。青梅街道を歩きながら、東京天文台の姿が見えたのが目の底に焼きついている。畑のまん中の丘の上にはぽつんとたってたんだ。――

わが家はその天文台の構内の宿舎、じさに泊っていた。だいたいわけだが、半世紀前のじさの感慨も、はやむかしであった。

火の玉、ひとたま、キツネのたまし、神かくしされた子呼びもどす時のこと、と、ふしぎもたくさんあった、それも

まあ、この電気が入るようになってから、こういうふしぎなことはなくなってきたんじゃないかねえろうか。

――  
むかしの間にはさまれる思い出ばなしは、辺々まで

鮮やかな記憶と、無駄のない、そのくせ濃やかな描写で、快い。

\*

語り手と聞き手が組み合わさって、むかしは成立する。そして時が経ち、それが熟成されていったものだけが語り手になる。

語り手の中でむかしは醸酵していき、聞き手を得て再生する。

じさは母の腹の中で、かたわらで、あたかも自らが体験したかのように感じつつ（『共感』、むかしをきいた、あるものはくり返し、ある時は一回限り）。

他の同胞には、その母の遺伝はなく、じさだけであつたということは、最も、というより、じさだけが、それを深く共感し得て、しかもそれを身の内に醸酵させ得たのである。

\*

この著書は、笠原のじさの語ったむかしを、全くそのまま、活字にしたものであることは、一見して私にはわかり得た。厚い本を手にとり、バラバラとめくってみると、いずこのページからも、じさの声が、耳にとどく。そして、じさの持つむかしの深さに感嘆する。編者の熱い思いがじさのむかしをていねいに再生

させたに違いなく、じさを知る私には懐しくうれしい。

越後の雪の夜にひそやかに語られたむかしが、わが息子の中に伝えられたろうか。そして私の語ったむかしが……。息子は、この春、関西の学府に飛び立ち、二度目のたよりに「時に、つらいが、快い」とあった。

(かっこう文庫主宰・駒沢女子短大)

『フェミニズム論争』 江原由美子 編 (勁草書房)

『わかりたいあなたのための フェミニズム・入門』 (別冊宝島 85)

『アグネス論争を読む』 アグネス論争を楽しむ会 編 (JICC出版局)

『男がさばくアグネス論争』 小浜逸郎 著 (大和書房)

『男も女も(半分こ)イズム』 男も女も育児時間を!連絡会編 (学陽書房)